

---

# 群青の下、緋色の上

東雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

群青の下、緋色の上

### 【Nコード】

N4539A

### 【作者名】

東雲

### 【あらすじ】

闇。光の当たらぬ場所。法の届かぬ場所。そこを生きる男は、凶大な力を手に、ひたすら己の手を血に染めていく。男は何のために力を得たのか。何を失ったのか。『復讐』という十字架を背負い、男は何を求めて戦い続けるのか……

## 第一話・『暗闇、硝煙、紅い瞳』…前編

この世界は、不条理で満たされている。

また、日常のすぐ裏には、非日常への入り口が待ち構えている

条理は不条理に抗えず、日常はいとも簡単に非日常へと変貌するのだ

群青の下、緋色の上

第一話・『暗闇、硝煙、紅い瞳』…前編

その男は、警察に追われていた。

ガラの悪い上着をはおり、その下には悪趣味な色彩のシャツを着ている。典型的なチンピラの服装である。

その足は、ただ一心不乱に地面を蹴り、また時折、水溜まりの水を蹴った。

その泥水はズボンの裾を汚したが、当の持ち主である男……チンピラは、そのようなことには目もくれずに走り続けた。

もはやその足は、走ること以外の動作を忘れてしまったかのように。

いったい、どれぐらい走っていたのか？

あたりは廃墟しかない住宅街、夜道を照らしているのは夜空に浮かぶ半月のみである。

チンピラは怯えきった目で後ろを確認したあと、糸の切れた操り人

形のように、その場に崩れるように座り込んだ。

もはや呼吸も満足に行なえず、足は鉛のように動かない。よほど体を、肺を酷使したのか、喉の奥からじわりと鉄の味がにじんだ。

「へへっ……しばらく煙草はいらねえか…」

汚れてシワだらけの上着の内ポケットから真新しい煙草を一箱取り出すと、自嘲気味に下卑た笑いを浮かべながらそれを投げ捨てた。周囲は暗闇と静寂に包まれ、人間どころか野良猫の気配さえない。これからどう行動しようか、それを考えていたときだった。

グシャ

まだ中身の入った煙草の箱を踏み潰す音が、男の背後から夜道に響いた。

「ひっ……!!」

チンピラは物音に驚きながらも素早く、上着の内側のホルスターから拳銃を取り出し、体ごと振り向き背後へと向けた。

チャキツ……と軽い音をたてながら、震える親指で大口径のリボルバーの撃鉄を起こした。

人差し指はすでに引き金へとかけており、いつでも発砲できる態勢だ。

「だっ……誰だ、テメーは!!」

…どう見ても、警官には見えない。  
僅かに声を震わせながらも、しっかり拳銃の照準を目の前の男に合  
わせて声を張り上げる。

射撃の基本通りに、狙いを体の中心へと向けながら、チンピラは恐  
らく敵であろうその男を観察した。

…黒い……

その男に感じた最初の印象はそれだった。  
短く刈り揃えられた、漆黒の髪。この北国ではめずらしい、恐らく  
は生まれ付きなのだろうが、褐色の肌。  
上下は黒のスーツ、中のシャツは茶色だが、ネクタイはまた黒だ。  
そしてその上に黒のロングコートを羽織り、また表情もサングラス  
で隠されている。

「……………」

「だ、誰だっ て聞 いてる だろう が!!」

ただ無言で見下ろしてくる男に、再度チンピラが声を張り上げる。

「………… アラン・ノーチェスだな……」

はじめて、目の前の男が口を開いた。冷たく低い、静かな声だった  
が、その名前は確かにチンピラのもだった。

「だ………… だっ たら なんだ っ てんだ!!」

なおも声を荒げるチンピラに、男はゆっくりと一步を踏み出した。

「……簡単なことだ……」

再び、静寂の中に男の音が響く。決して大声ではないが、その冷たい声色は、ただそれだけで堪え難い威圧感があった。

「……今、この場で、お前には死んでもらう……」

第一話・『暗闇、硝煙、紅い瞳』…中編

非日常への扉は、常に開いている

日常から非日常の世界へは、簡単に踏み入ることができる

しかし、一步でも非日常の世界へ踏み込んだら。

その者の人生の終焉まで、非日常は終わることはない。

群青の下、緋色の上

第一話・『暗闇、硝煙、紅い瞳』…中編

「……今、この場で、お前には死んでもらう……」

その言葉は予想はしていたが、まさかこうもストレートに言われるとは思っていなかったため、チンピラは一瞬呆氣にとられた。

…確かに、目の前の男は得体が知れない。しかし、どう見ても丸腰である。仮に懷に武器を隠し持っていたとしても、それを抜いて狙いをつける前に、こちらが先に撃つことができる。

そう判断したチンピラは、今度は強気な態度に出た。

「殺すって？この俺を？……あんた、素手で俺とやるつもりか？」

明らかに馬鹿にした言葉を発して挑発するが、目の前の男は表情も変えずに立ち続けている。

「言うておくが、それ以上一步でも近づいたら……」

チンピラが全てを言い終わる前に、その男は一步踏み出した。途端に、チンピラの顔つきが変わる。

「…そうか、なら死ねよ！」

この距離で、体の中心を狙う。どんな俊敏性を持つ人間でも、銃弾をかわすことは不可能だ。

そして目の前の男は、決して逃げるつもりは無いようだった。

チンピラは、口元に下卑た笑みを浮かべながら、引き金を引いた。

パァンッ  
！

乾いた銃声が暗闇に響いた。放たれた銃弾は正確に目の前の男の胸へめがけて突き進み、そして、最終的にはその男の人生を締め括るはずだった。

しかし…



ガキン！

耳をつんざくような、甲高い金属音。

何事も無かったかのように立ち続ける、目の前の男。

非日常への扉が、開いた瞬間だった。

「……っ…胸に、プレートでも仕込んでるのかよ!？」

チンピラは、すぐさま男の頭部へ狙いを変えた。露出した頭部なら、確実に仕留められると思つての行動だった。

パンッ！

(……ざまあみろ)

心の中で目の前の男へ別れの挨拶を呟く。再び、乾いた銃声が響いた。それと共に、男の頭からは鮮血と肉片が飛び散り、一つの命が消え失せる。

仮にも裏の世界を生きるチンピラにとって、見慣れたシーン。

の、はずだった。

ギン！

(…よし、当たった)

(……金属音?)

(…いや、仰け反った。倒れる)

(……そんな馬鹿な)

ジャリッ

大きく仰け反った男は、そのまま倒れるように見えた。

(……ありえない、そんなことがあるわけが…)

(……なぜだ)

(…なぜ、倒れない!?)

しかし目の前の男は、わずか一步後退しただけで踏みとどまった。

仰け反っていた男は、再び体を起こして直立不動の態勢をとり、拳銃を構えたままのチンピラを見下ろした。

「……ずいぶんと、お粗末な弾だな？」

そんなはずはない。チンピラの持つ大口径の拳銃なら、たとえ防弾チョッキを着用した人間にも十分な致命傷を与えるはずだ。

その時、先程の銃撃のためか、男が掛けていたサングラスのフレームが折れ、小さい音をたてて地面に落ちた。

そこにあつたのは、二つの紅い瞳。

ほとんどを黒に包まれた男にとって、唯一の色彩と言えるほどの、鮮やかな紅だった。

その両の瞳を見たときにチンピラの顔色は蒼白となり、手に持つ拳銃はもはや狙いもつけられないほど大きく震えだした。

「…シユヴァルツ・ホルニツセ……！」

その言葉を聞き、はじめて男は表情を見せた。

まるで嫌なあだ名で呼ばれたように、わずかに目を細めて顔をしかめた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4539a/>

---

群青の下、緋色の上

2010年10月9日02時46分発行